

情報科教育法における伝達力育成学習の実践報告

岡本 覚子[†] 栗田 るみ子[†]

城西大学経営学部[†]

1. はじめに

中央教育審議会は平成18年(2006)7月「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」[1]の中で、1. 教職課程の質的水準の向上 (2) 「教職実践演習(仮称)」の新設・必修化―教員として必要な資質能力の最終的な形成と確認―で、『授業方法については、役割演技(ロールプレーイング)やグループ討議、事例研究、現地調査(フィールドワーク)、模擬授業等を取り入れることが適当である』としている。これは、教科の専門性の習得の他に、教員として必要な(指導力などの)資質能力、適性、意欲等を事前に確認し、また教員を志す者としてふさわしい学生となるよう、自覚を持たせることが重要であると考えからである。教員志望の学生は現場で教育実習を行うが、授業の実施は、人前で話をする、相手に理解させる、授業の時間配分を読むなど、座学の知識では得られにくい能力が必要であるため、教育実習に対して臆してしまうことも多い。このような場面を教育実習前に経験することは、特に実習系の科目に大いに役立ち、自信につながると考え、学内実習を取り入れている。

この一連の流れを、学習意欲のモデル「ARCS」に重ね合わせ、今回特に4つの概念のうちC(Confidence:自信)に着目し、学内実習の経験が「C(Confidence:自信)」の確立につながることを、学生の自己評価から確認した。

2. 対象授業

平成22(2010)年度入学生から、教育実習に関わる教育行政の大きな流れとして、「教職実践演習」が必修科目として設けられ、教員としての資質や能力を確認することになっている。教育実習と教職実践演習との関係は中教審答申(2012)に「教育実習を中心に、教員として実践指導の基礎となる力を身に付けるとともに、教職実践演習で学部における学びを総括する」と示されている。このような事を踏まえて、本研究では、学部の専門性とPC操作をリンクさ

せた情報系実習科目への学内教育実習を実施した。

実習生は、高等学校、教科情報の教員免許を取得する学部の3年生であり、3年次に履修する「情報科教育法」「情報科教材研究」で、教材研究や指導法について学習し、学習指導要領や教科書に基づいて学習指導案を作成している。3年生の11月に各自が作成した教材を基に学内実習を行うことにより、授業の準備・展開という一連の流れを体感する。

学内実習先の科目は、経営学部1年生の後期の情報リテラシー科目で、経営学のための情報処理として、学年統一シラバスを使った1クラス約60名のクラスである。必修科目であるため3年生自身も履修してきた授業であり、自分たちの知識と体験を役立てて授業実施に臨むことができる。学内実習の実施は2015年度で9年目を迎えていることから、リテラシー担当教員たちも、学内実習の実施については授業の進行の負担になることなく進めている。

実習生は、4回学内実習を経験するが、まずTAとして授業をサポートし、学生に近い立場で授業に参加しながら、学生の動きを確認する。また並行して担当教員と授業計画を相談し、「情報科教材研究」の授業で作成し持参した幾つかの指導案や教材を基に、再度指導案を調整し、学内実習に臨んだ。

3. ジョン・M・ケラーのARCSモデル

3-1. ARCSモデルとは

Kellerの提唱したARCSモデルは、学習意欲を「Attention(注意)・Relevance(関連性)・Confidence(自信)・Satisfaction(満足感)」の4つの側面にとらえ、学習者のやる気を喚起するための方法として、学習モデルを体系化している。

3-2. 学内実習に対するARCSモデル

ヒント集[2]を参考に、今回の学内実習に適用するモデルを作成した。抜粋して表記する。

(1) Attention(注意)＜面白そう＞

A-1: 知覚的喚起: 目をぱっちり開ける

- ・TAとして学生サポートをする

- ・教科書を確認し、教材を意識する

A-2: 探求心の喚起: 好奇心を大切にする

- ・今まで習ってきた知識を確認させる

Practice Report of Growing Learning for Teaching Competency in Information Study

[†]Satoko OKAMOTO, Rumiko KURITA

[†]Josai University Faculty of Business Administration

A-3 変化性：マンネリを避ける

- ・自分で授業のやり方を工夫することを楽しむ
- (2) 関連性＜やりがいがありそう＞

R-1：親しみやすさ：自分の味付けにする

- ・対象科目は過去に自分が履修した科目である
- ・経営学部生として関連が深い内容である

R-2：目的志向性：目標を目指す

- ・教育実習の予行練習としての学内実習である

R-3：動機との一致：プロセスを楽しむ

- ・自分なりの授業の進め方を考えられる

(3) 自信＜やればできそう＞

C-1：学習要求：ゴールインのテープをはる

- ・説明のポイントは、講師と確認ができています

C-2：成功の機会：一歩ずつ確かめて進む

- ・うまくいったと感じた部分と、うまくいかなかったと感じた部分について記録をとり、本番の教育実習に生かす

C-3：コントロールの個人化：自分で制御する

- ・学生反応にあわせて対応を変える

(4) 満足感＜やってよかった＞

S-1：自然な結果：無駄に終わらせない

- ・用意した資料の有効性を確認する
- ・授業の時間配分が計画通りかを確認する

S-2：肯定的な結果：ほめて認めてもらう

- ・人前で話をする経験ができた

S-3：公平さ：自分を大切に

- ・結果を喜べない場合、何が原因になっているかを、冷静に振り返る

4. 学内実習後のアンケート（記述式）の分析

ARCS モデルを基にアンケートを 17 項目作成し、学内実習後の 3 年生に実施して、学内実習を振り返らせた。なお今年度の履修学生（3 年生）は 10 名である。抜粋して表記する。

●担当教員から提示された要求レベルは高いと感じましたか（C-1）：10 人中 9 人が高いとは感じなかったと回答した。3 年生にとっては様子がわかっている授業であるため、余裕を持って授業に臨むことができたと考えられる。

●授業で自分の実力を発揮できましたか（C-2）：発揮できたかは、ほぼ半数に分かれた。理由として、「時間内に終わらせられた」「早口になってしまった」「進行が悪かった」「スピードの調整がうまくできなかった」「学生とのコミュニケーションが取れなかった」「教える内容」などが挙げられたが、回答は授業の内容よりも時間進行にやや片寄った。

●授業実施時、学生の反応に合わせて対応を変えたりできましたか。また、クラス運営や時間配分はうまく管理できましたか（C-3）：10 人中 8

人が、1 年生の反応を見ながら授業を行えたと回答した。また時間配分は 4 人が上手くいったと回答した。

●数十人の前に立って指導する場合の注意点は何かと感じましたか（S-2）：回答[表 1]を見ると、ほぼ全員が「学生の反応をよく見ることを挙げており、理解できていない学生へのフォロー、学生の注意をそらさない対応、適度な授業のスピードなど、「柔軟な対応力」の大切さを挙げています。

5. まとめ

本研究から実習生は、学内教育実習を通じて、教員に必要なのは、教科の専門性のみならず、指導力（授業時間配分・クラス運営）など、教員に必要な資質であることを意識した。1 年生の授業を 3 年生に任せるという大胆な試みであるが、その重要性を 3 年生は十分に理解し授業準備に励み、貴重な機会に満足感を持って終えることができた。学内実習の体験が本番の教育実習でどのように生かされるかを追跡調査し、今後の研究に生かしたい。

参 考 文 献

[1] 中央教育審議会，“今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）”（2016/1/3）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337006.htm

[2] 鈴木克明，“学習意欲を高める作戦（教材づくり編）”（2015/11/23）

<http://www.spc21.jp/consul/docs/ARCS.pdf>

表 1：数十人の前に立って指導する場合の注意点は何かと感じましたか（S-2）

分からない学生に合わせてあげることが、一番大切だと思った。
聞き取れない人が出ないように、なるべくゆっくりとまぎり話すが良いと思った。
学生の反応を確認しつつ、学生が理解できる授業の進め方が大切だと思った。
学生たちを見ながら、どのように進めたらよいかを考える。わからない人をそのままにしないで、わかるまでやることだと思った。
まず学生の顔を見ながら発表しないと、伝わらないと感じる。
友達同士で座っていると、関係のない会話が始めたりしてしまい話を聞かない学生もいた。1度の説明で理解できる子もいれば、話を聞いていても理解できない子、違うことをしてわかってなくなってしまう子、など様々でした。できる子に合わせるのではなく、何回か同じことを説明したり、大きな声で話したり、注意したりすることが大切だと感じた。
自信はないけれど、自信がないほうが喋っても相手は口も何も伝わらないと思った。間違った事を言ってしまったも、そこからまた明るく、学生の方をしっかりと向いて喋る事が大切だと感じた。
説明的な文で話すと学生が興味を無くして話を聞かなくなるから、例え話などを用いて学生の興味を引くことが必要と感じた。
前には学生は口は目が見え、後ろの学生は口は目が見えないので、注意して全体を見ている必要があると感じた。
大事なことは授業ペースだと感じた。速すぎず遅すぎず、適度なスピードを心掛けて授業することが大切なんだと感じた。